
花紡ぎの国

縁合 紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花紡ぎの国

【Nコード】

N1102U

【作者名】

縁合 紫

【あらすじ】

ここはフェローニア王国。この国では花の新品種を作り出す専門士フランツェンと呼ばれる者たちがいる。フランツェンを目指すリヤナン・エルスターとフェローニア王国・国王ルトナー・フェローニアの紡ぐ物語。

プロローグ（前書き）

導入です。

主人公の名前すら出てきませんが、特殊世界ものです。

プロローグ

海に囲まれ冷涼な気候に恵まれた国、『フェローニア王国』この国は一人の王と四家の貴族が政治を担っている。決して大国とは言えないこの国を支えているものは農業である。畑には精霊が住み、豊かな実りを与えてくれると信じられていた。この国は何よりも花の新品種を作ることにかけていた。フェローニア王国での花とは、バラ・ダリア・キク・ラン・クリスマスローズを指し、この五品種の花の育種に携わる者は『フランツェン』と呼ばれ、国民あこがれの職業だ。フランツェンになるためにはまず、国内唯一の大学、スタンホール大学に進学する必要がある。十八歳から二十二歳までこの大学に在籍し、花に対する基礎知識から精霊のことまでを学ぶ。

土を耕し種をまく、そして精霊の力により実りを得たり、新たな花を咲かせる。新たに生み出された品種を諸外国に売り外貨を獲得する。繰り返される日々に国民は満足していたし、これからもそんな日々が続くと疑いもしていなかった。島国故に他国からの侵攻もされず平和に暮らすこともできていた。

変化と言えば半年前に起こった。前王が突然崩御したのだ。すぐに息子が即位することとなった。王の名はルトナー。フェローニアという。まだ二十歳の若き王の誕生に国は大いに盛り上がった。しかしそれも最初の一月程度で終わり、いまはただ単調に国民の生活は送られていく。

王の動向を最も気にしているのは他でもないスタンホール大学に在籍するフランツェンの卵達だ。なぜならば皆、国王認定が欲しいからだ。この国において新品種の認定は二種類ある。一つは、『普通認定』もうひとつは『国王認定』という。普通認定とは届け出れ

ばどんな花でも品種として認定される。ただし、その場合は工芸花
きとしての認定であり、主に国内で染料としての使用が目的の花に
なる。国王認定とは文字通り国王が気に入った花を品種と認定する
方式だ。この認定を受けられることができると、純粹に花としての流通
となり国外への輸出が認められる。大学在籍中に国王認定を受ける
花を作出することができれば、何の憂いも無く大学卒業後フランツ
エンになることができる。4年間の間に国王認定の花を作出できな
ければ、筆記試験に合格しなければいけないになってしまうのだ。当
然難易度も高い。在学中に一品種でも国王認定を取るべく学生たち
は精霊の力を借りようと花の栽培に精を出す。

一日の始まり（前書き）

本編開始です。

一日の始まり

フェローニア王国・国王直轄地にある糸屋「エルスター」。その長女リヤナン「エルスター」の朝は早い。まだ、空が白み始めたばかりのころに起きだして身支度を整える。

シャツに作業用オーバーオールを着て、栗色の肩より少し長い髪を一つにまとめてリボンで縛る。このリボンはスタンホール大学に進学が決まった時に刺繍屋の幼馴染がくれたもので、緑と青の縁取りに鳥の模様が刺繍されている手の込んだものだ。最後にフランツェンの証ともいえる白いセーラー型のつけ襟をつけて身支度を終える。鏡に映った真つ白い襟を見てリヤナンはため息をついた。

リヤナンはまだスタンホール大学の三年生で正確にはフランツェンではないが、大学生にもフランツェンと同じ襟が与えられる。この襟には国王認定が得られたときに認定された花と同じ色の糸の刺繍がされる。つまり、まだ真つ白の襟のリヤナンは国王認定を貰ったことがないということだ。

（できれば今度の開花する花たちで認定を取りたい）

何度も思ったことだが、未だに叶ったことはない。四年生の夏までに国王認定を取れなければ、筆記試験でフランツェンになるしかないが、それは花を咲かせることよりも困難に思えた。少し沈んだ気持ちで鞆を持ち部屋を出ると、まだ眠っている家族を起こさないように静かに階段を下りた。リヤナンの家の一階は糸屋になっており表口は国王陛下の住まいであり政治の中枢である城へ続くメイソンの通りに面している。裏口に出ると石造りの離れがあり、そこは父親と兄の仕事場の糸を染める工房になっている。離れに入らず右に折れると広い畑があり染料につかう花たちが栽培されていた。畑の一角には去年リヤナン普通認定を取ったオレンジ色のダリアが咲いている。「いい色が出る」と父親がずいぶんと褒めてくれてリヤナンは素直に嬉しかった。さらにその花で染めた糸の売れ行きも良く

今年は栽培面積を少し増やしてくれた。畑を一回りしてから、工房に入ると染物を作る竈に火を入れる。火が付いたことを確認するとリヤナンは工房を出て学校へと向かう。

まだ日が昇りだしたばかりで薄暗い中、石畳をなれた足取りで進むと速足のリヤナンで三十分程歩くと城の向かいにあるスタンホール大学に着く。一学年四十人の生徒数それぞれに畑が割り振られており座学よりも各個人の栽培の方が重きを置かれている。リヤナンは自分に割り振られた畑に向かう。そのころにはもう日は昇りきり、周りの様子もよく見える。鞆からノートを取り出すと今日新たに咲いた花の花姿を書いておく。井戸から水を汲んで花たちに与えると、一度畑を後にした。大学の隣にあるカフェに向かう。

「おはようございます」

リヤナンが扉を開けて店の中に向かって声をかけると、人のよさそうなお店の店のおかみさんが、

「おはよう。リヤナンちゃん。今日も早いね」

と言いながらリヤナンに袋を手渡す。お金を払ってそれを受け取ると、サービスだといって葡萄ジュースを渡してくれた。お礼を言い、店を出ると再び畑に戻る。半年前に兄が結婚してからはこのカフェの常連だ。朝食の準備は兄嫁の仕事なのだが、五人分は面倒くさいと言外に言われてしまったためである。はつきり言って不経済なのだが、関係をこじらせると面倒くさいことになるのは目に見えているし、家族にも迷惑がかかるのでなにも言わなかった。家族が起きるよりも早く家を出るのもこの兄嫁と顔を突き合わせるのが面倒くさいからだ。

カフェで買ったチーズサンドを食べながら今日の授業を考えていると、不意に後ろから影が差した。

出会い

リヤナンが振り返るとそこには身なりのいい男性が一人立っていた。
(見たことない人だな。)

年齢はリヤナンと同じ年くらいで学生に見えるが、全校生徒が百六十人しかいない学校で新年度が始まって一か月足らずとはいえ見たことない学生がいるとは考えにくい。ここは、部外者は立ち入り禁止だ。注意するのも学生の義務と、男性に話しかけようとしたとき、男性が先にリヤナンに声をかけた。

「おはようございます。君はここの学生だよな？」

ゆったりとしているのどこか逆らえない声に思わず

「そうですけど」

と、普通の返事を返してしまう。

(違う。こんなことが言いたいんじゃないやなくて…！)

たった一言で相手のペースに乗せられたことを少々悔しく思いながら、質問の言葉を出そうとすると、

「よかった。畑に人はいるのに学生が全然いないんだもん」

とさらにマイペースに話を続けられてしまう。

「彼らは畑守り達ですよ。それよりもここは部外者の人は立ち入り禁止です」

言外になぜここにいるのだ。と告げ、この場を離れようとする。知らない人にはかかわらない。なぜならば面倒くさいから。仕方がないので、だいぶ早いが教室に向かうことにする。

「ああ。そっか。うん、それは大丈夫。ちゃんと許可を取ってあるから。それよりも畑守りって何？彼らは部外者じゃないの？」

こんなに朝早くから見学者というのも不思議だし、そもそも見学者は畑まで入ってこられないはずである。この学校の一番の財産は花である。それがあつ畑は正規の見学者でも入って来られないはずだった。

(貴族だから…、か)

男性の身なりからして明らかに貴族である。貴族の前ではルールなどないも同然だった。リヤナンは少し眉を顰めながらも、

「畑守りってというのは、貴族が子供のために雇っているその名の通り畑を管理して花を咲かせるのが仕事です。多くはこの学校の卒業生で、フランツェンになれなかった人です。本来は学生以外を立ち入らせることは禁止ですけど学校内に貴族のやることに反対できる人はいないですし、雇用創出っていう側面を出されると強く反対もできないですね」

彼らがどんなに優良品種を作ってもそれらはすべて、本来の畑の持ち主である貴族が品種の登録者となる。正直報われない仕事だとリヤナンは思っている。しかし今のリヤナンに一番近い未来でもある。多少の刺を含ませながら、リヤナンは言うが無意識に下を向く。地面に映る男性の影が近づいたのを見て、リヤナンは無理やり顔を上げると、男性は微笑みながら、

「申し遅れました。僕はローンニエルです。できたら君の畑を案内して欲しいのだけど」

そう言っただけで差し出された手をなぜかリヤナンは拒むことができなかった。ニエル家と言えば四家ある貴族のうちのひとつで国王陛下とも縁戚関係にある由緒正しい家柄の人間だ。できれば貴族となんか関わりたくはない。しかし、思考に反してリヤナンは

「リヤナンニエルスターと申します。私でよければ、授業が始まるまでならご案内致します」

と答えていた。

案内

とは言え、リヤナンは今まで見学者の案内などしたことはない。まして自分の畑の説明など相手は何を知りたいのかもわからないのだ。相手を伺うような視線を向けると、それに気が付いたローンは、畑に向けていた視線をリヤナンに向けながら、

「君は精霊に愛されているね」

と告げた。その言葉にリヤナンは狼狽えた。精霊たちは目には見えない。節目のお祭りで祈ったりはするけれど特別加護があると感じることあまり無い。むしろ精霊の加護は国に与えられるもので個人に精霊が肩入れをするとは考えもつかなかった。ローンはリヤナンの狼狽を感じ取ったようだが、マイペースに話を続ける。

「国王認定の花を親株に使ったりはしないの？」

「国王認定の花は高いので庶民がおいそれと使える代物ではないですから」

リヤナンは少々むかつきながら答える。基本的に育成株は生徒の自腹で買う。学校で同じ花を支給しては多様性が生じないというのが理由だ。しかしそこにも貴族たちと平民の間に差が生まれる。国王認定の花からはやはり国王が気に入るような花が多く作出されるのだ。そのため貴族たちは国王認定の花をふんだんに使い新品种の育成に勤しむ。庶民には経済的理由でそんなことは到底真似はできない。

「え？花って学校から支給されてるんじゃないの？」

「違います。自己負担の自己責任ですよ」

もはやリヤナンは怒りを通り越して呆れてしまった。ひとつため息をついてリヤナンは、

「じゃあこんなことは知っていますか？国王認定を取るためには貴族にお金を積まなくてはいけないこととか」

貴族が作った制度を貴族が知らないということに、呆れと怒りと諦

めが絡み合って、リヤナンは公然の秘密とも言えることを暴露する。ローンはとても信じられないというような顔をした。

「国王認定を受けるためには、貴族の予備認定を受けなくてはなりません。その予備認定をクリアするためには貴族であることか貴族にお金を払う必要があります。残念ながら私にはそんな財力は無いのでどんなに精霊に愛されていようと将来的には畑守りになるのがやっとでしょね」

最大限嫌味に聞こえるように一息に行った後で、リヤナンは我に返った。日ごろからどうにもならない焦燥感に駆られていて、それが目の前の青年との会話で破裂してしまった。これではただの八つ当たりである。気まずい思いのまま、もはやローンを見ることさえままならず、

「申し訳ありませんが、そろそろ授業の時間なのでこれで失礼します」

と言ってローンの前から辞した。

授業前

全力疾走ともいえる速度で校舎に逃げ込んだリヤナンは教室の前で座り込む。授業を口実にしたが、本当は授業まではまだ時間がある。人影も疎らでおそらく教室内にはまだだれも登校していないはずだ。それでも見知らぬ男性に八つ当たりともいえる発言をしてしまったことが後ろ目たくそのまま教室に入ることができなかった。呼吸を整えて廊下にある窓から空を見上げる。リヤナンの心とは真逆の澄み切った青空を見て、今日も一日晴れそうだと思った。それをきっかけに徐々に通常の思考回路が戻ってくる。ローンに八つ当たりとしか思えない発言を謝りに畑に戻ろうかとも思ったが、まだ畑に居るとは思えなかったし、やはりなんとなく気が重い。深呼吸をして、リヤナンは立ち上がり今度こそ教室に入る。案の定まだ人影はなく、リヤナンは一番乗りだった。席は特に決まっているわけではないのだが、3年も通っていると自然と定位置が決まってくる。自分の定位置に座ると教科書を机の上に出す。忘れ物がないかを確認したら、一時間目の授業の教科書のみを残して再び残りを鞆にしまった。そこまですると廊下から学生の足音が聞こえてきた。この学校は他の領地から入学する生徒も多いので寮制度がある。平民で他領地の生徒は寮生活、貴族階級の生徒は国王直轄地に別宅を設けているのでそこから通う。

教室の扉が開くと十数人の生徒が教室に入ってきた。

(いつもと同じ顔触れだ)

とリヤナンは思った。無意識にローンが入ってくるのではないかということを期待していたらしいことを自覚して首を振る。

「おはよう。リヤナンちゃん。今日も早いね。っていつか何かあった？」

と話しかけてきたのは、リトルアールハース。肩まである茶色い髪をまっすぐ下して、リヤナン同様オーバーオールを身に着けている。

緑色の瞳が印象的な可愛らしい顔をしている。本人は実年齢よりも年下にみられることが不本意らしい。本来は同じ年だが、実年齢よりも上に見られることのあるリヤナンと並んで姉妹に見られたこともある。

リヤナンと同じクラスの生徒だ。そして彼女の襟もまた真っ白である。

「おはよう。別に変ったことは何もなかったよ」

と、リヤナンは嘘をついた。どうやら少し挙動不審だったらしい。曖昧に笑いながら、隣に座りながらリトルアが話す寮内での珍事に耳を傾けた。話を聞いているうちに、再び扉が開くと、現れたのはアリアラ。ゼストだった。貴族四家のうちの一つゼスト家の令嬢である。派手な金髪の髪を頭頂部でまとめ上げ派手なドレスを着こんでいる姿は、もはや畑に出て作業をする格好とは思えなかった。その姿を認めるとリトルアはあからさまに顔を顰めたが、そんな様子に気づくことなくアリアラは二人に近づいてきた。襟には赤い糸で一本線が入っている。

「おはようございます。二人とも予備認定の準備は済みまして？」

甲高いアリアラの声が響く。その言葉にリトルアは増々険しい顔になった。要するにアリアラは予備認定を通すための賄賂を二人に要求しているのだ。

「すでに国王認定を頂いているあなたには全く関係のないことです！間違ってもあなたに

頼ることはございませんのでご心配なく！」

教室中に響きわたるような声でリトルアは反論した。このやり取りは三年生になってからここ一か月程毎日のように続いていた。なぜアリアラが数多くの同級生の中から自分たちに声をかけるのかよくわからないが、ここまで続くとリヤナンもさすがにうんざりしてくる。教室内で堂々と賄賂の話ができるほど貴族の副収入は公然の秘密となってしまうことにも行き場のない怒りを感じた。リヤナンがすっかり他人事のように二人のやり取りを聞き流していると、

「貴方達、私の機嫌を損ねたら予備認定すら通らなくなりましてよ」
アリアラは捨てゼリフを投げつけ、自分の定位置に戻った。リヤナ
ンはその言葉をやっと終わったかと安堵の息をつきながらふと引っ
かかったことがあった。しかし、その思考回路は一時間目の教師の
入室と共に一度遮られることとなってしまった。

授業前（後書き）

小説家になろうランキングのタグを挿入しました。気に入っていただけたらポチして頂けるとパソコンの前で踊ります。更新速度も上がるかも。

授業

一時間目の授業である、精霊学を聞きながら、リヤナンはローンと名乗った青年のことばかり考えていた。

ニエル家と言えば裁判官や政務官などの国政に関わる人間を多く輩出している家だ。貴族の中でも名門で国王陛下と外戚関係にあったはずである。国王陛下と関係が深いからか、フランツェンになる者は少なく、今この学校にニエル家の者は居なかったはずだ。

(だから認定のことに疎かったのか)

授業中にも関わらず自分の思考に没頭しさらにため息までつくリヤナンは、ここで重大なことにたどり着いた。

(名門と言われる大貴族様に大暴言を吐いたのよね)

朝の自分の言動と先ほどのアリアラの「貴族の機嫌を損ねると予備認定すら通らなくなる」という言葉が合わせて思い出されてリヤナンは思わず頭を抱える。もはや授業中であることすら失念しているというかそれどころではない。用意できない賄賂と貴族の機嫌を損ねたという事実はどうしようもない焦燥感が湧き上がってきてしまっていた。

(あゝ、もう。考えるのは止めよう)

無理やり思考を中断させて周りを見渡せば、隣に座っているリトルアが怪訝な顔でリヤナンを見ていた。何か聞きたそうだが授業中なので私語をするわけにはいかないと葛藤があるようだ。

なんでもないと言うようにリヤナンが首を振ると、リトルアは渋々ながらも授業を聞く態勢に戻った。リヤナンもそれを見て、今度こそ授業を真面目に聞く。

精霊たちがどのように花を渡り産まれてくるのかくるのかをとつとつと語る教師の話聞く。精霊は目に見えないが、それでもそこにいるのだと。いうことをリヤナンは信じ切れていなかった。節目のお祭りなどには人並程度には決められた祭事をこなすし、行わな

いことによる厄災も怖さはあるのだ。それでも、

（あんなに当然のこのように話されると引いてしまうのよね）
そんなことを言ったら目の前で熱弁を振るう教師は間違ひなく剥いて怒るだろう。「貴方には信仰心が欠けています」と容赦なく糾弾を始めるに違ひない。そんなことはごめんだ。リヤナンは態度だけは真面目に授業を聞いた。

授業終了まであと三十分・・・。

授業（後書き）

更新遅くなりました。7月いっぱいにはちょっとペースが落ちそうです。
申し訳ない。

陛下と宰相

リヤナンが授業を受けている頃、スタンホール大学と道路を挟んで向かい側に建っている全ての意味でこの国一番の建物、フェローニア王国城。外観は煉瓦造りのフェローニア王国においては、いたって普通の建物だが政治の中枢にして王の住居だ。

「陛下！無断で城から出ないで下さいと申し上げたはずですよ！それにもうすぐ朝の議会の時間ですよ！国王陛下が遅刻など以下の外です！」

そんな荘厳な場所に似つかわしくない男性の大声が響き渡る。年の頃は五十代半ばと言ったところだ。身長はそれなりに高身長で、声にも張りがある。彼は先代国王陛下の終盤の治世を支えた男でこの国の宰相だ。そんな彼が切れ長の青い目を吊り上げて怒り狂っている相手は、この国の若き国王、ルトナー＝フェローニアだ。

しかし、そんな怒りをルトナーは涼しい顔で反論する。

「だから、朝の会議には間に合うように帰ってきたじゃないか。ローン＝ニエル宰相」

「そんなことは当たり前ですよ！陛下が行方不明のため欠席なんてことになったら近衛兵の首が門前にさらされることになります！」

ルトナーのささやかな反撃は失敗に終わった。猶もまだローンの説教は続く。

ルトナーは、宰相の説教を半ば無視して、会議の行われるコンフェレンツ・ルームへと歩みを進めた。部屋の前まで行ってしまえば、ローンの説教も強制終了するだろうと踏んでいる。

「だいたい陛下が城下を軽々しく出歩いているとなったら、貴族の者たちが陛下を軽く見ることになりかねませんよ」

「さすがにそれは解ってるよ。だからこそ出歩くときはローン＝ニエルって名乗ってるし。顔を見ただけで僕が国王だってわかる市民はそう居ないだろう？」

自信満々に答えたルトナーだが、ローンの反応は悪い。

「陛下？もしかや外では私の名前を騙っているのですか？」

宰相の声の温度が一段下がる。どうやらルトナーは地雷を踏んだらしい。

「それこそばれたら一大事ですよ！陛下の信用が落ちたらどうするのですか！」

今日一番のローンの落雷にさすがにルトナーは首を竦めたが、

「無いだろ。最初からそんなもの」

すかさず自嘲気味にルトナーは吐き捨てた。

「そんなことは…」

一転して狼狽えるローンに、さらにルトナーは言葉を重ねる。

「僕が若いからだか、先王がそうだったからか知らないけど、貴族の議員達は国王を差し置いてこの国を好きなように動かすすぎていると思わないか？」

先ほどの態度とは打って変わって真面目な物言いをするルトナーはまさしく国王陛下下の威厳を兼ね備えていた。

「陛下…。それは…」

言いよどむローンにルトナーは

「わかってるよ。今、あの狸爺達に噛みついたって良い様に丸め込まれるのが落ちだったこと位は。だけど近いうちに必ず取り返して見せる」

ルトナーはローンを前にはっきりと宣言した。そこで二人は、丁度コンフェレンツ・ルームに辿り着いた。ルトナーは一つ深呼吸をすると扉に手をかけて中に入る。

ここから先は国王陛下として一分もの隙も見せることは許されない。

陛下と宰相（後書き）

お約束通りかと思いますが、リヤナンが出会った青年は偽名を使った国王陛下でした。

今回とてもノリノリで書けました。この陛下と宰相コンビは書きやすい見たいです。

議會

部屋の中にはすでに、初老の男性四人が椅子に座って談笑をしていた。ルトナーの入室を認めると、立ち上がり皆一様に頭を下げた。それに答えることもせずルトナーは真つ直ぐに一番奥に置いてあるひととき豪華な装飾のされた椅子に腰を下ろす。国王が席に着いたのを見て他の四人もそれぞれの席に着く。

最後にルトナーと一緒に部屋に入った、宰相のローンが国王の後ろの少し離れたところに置いてある椅子に着くと、部屋の中の全ての席が埋まる。

「今日の議題は……」

「陛下。今日は、レダ地方から王都へ至る道の整備の案件が上がってきておりまずぞ」

真つ先に声をかけた男はアルタイ家の代表、ジェン＝アルタイ。

ルトナーの言葉を遮ることなど不敬以外の何物でもないのだが、気にする素振りすら見せない。こんなことは即位してから数えきれない程あり、今更怒る気にもならないルトナーは無言で続きを待つ。

「レダ地方は我がアルタイ家の領地。わたくしめにお任せ頂ければ完璧に整備して御覧に入れますよ」

かなり芝居がかった言い様に、ルトナーは内心ウンザリしながらも「ではそのように」とだけ答えた。

その他にも色々な議題が持ち上がったがそれら全てが議員達の連携により国王のみが局外者として進められて行く。

（これが私欲のためじゃなかったらむしろ褒められるべき議員達なんだけど）

着々と片づけられていく議題を大して興味の無いように見せかけながらも内容を取りこぼさないように覚えていく。あとで信頼できる手勢にどのように議員達が私腹を肥やしているのかを、調査させる

ためだ。議題が出尽くしたころ、

「時に陛下。即位されてから半年が経ちましたし、そろそろ国王認定の方もしていただかないと」

声をかけてきたのはストラス・ゼスト。四人の議員達の中でも一番の年長者である彼は、たつぷりと脂肪のついた腹回りをさすりながらルトナーに持ちかける。

「ああ。そうだね。そろそろフランツェンや、大学生の畑を回ってみようかと思っていたところなんだ。」

ルトナーは突然の向けられた矛先に動じることなく最大限の威厳を保ちながら答える。今朝すでに大学の畑に行ったことはもちろん明かさない。ルトナーの言葉を聞いたストラスは多少慌てたように早口に捲し立てた。

「いやいや。ご多忙な陛下に全ての花を見ていただく必要はありません。私どもが国王認定にふさわしいと思える花を見つけてきますので、陛下にはその中から選んでいただくのがよろしいかと」

(これが予備選考か。彼女の話が本当なら裏で金銭が絡んでいるはず)

予想通りの返答に内心苦笑いをするルトナーだが、それを表には出さず、

「いや。何しろ普段の案件事項は優秀な議員達が十分に働いてくれているからね。自分の責任くらいは果たさないと、精霊達に申し訳ないと思つて」

極上の笑みを張り付けてストラスの要求を躲す。

「しかし陛下。フランツェンは大学生まで含めると四百名程度居りますし、花の咲く時期も決まっていることを思うとすべての畑の視察は現実的ではないかと思いますが」

きつぱりと言い切ったストラスにルトナーがさらに説得を試みようとしたとき、後ろでローン宰相が椅子から立ち上がり、

「陛下がなさると言っているのですからこれ以上の議論は不要かとおもいますが」

とストラスを窘めた。

「しかし……」

猶も言いつのろうとしたストラスにローンは、

「どうしても出来ない様だったらまたその時に新たな方法を考えれば良いではないですか。全ての議題も出尽くしましたし今朝の会議はここまでに致しましょう。いいですね陛下？」

さっさとまとめに入ったローンにルトナーは

「ああ。皆もご苦労だった」

と頷いて議会の閉会を告げた。

昼食時

授業終了の鐘がなる。午前中の授業がすべて終了して、リヤナンは人目もはばからず思いきり背筋を伸ばす。その瞬間に背骨の関節が鈍い音を立てたような気がするが気にしない。体が伸びきったところで力を抜きながら止めていた息を全て吐き出す。体の固まりがほぐれたところに、

「リヤナンちゃん。お昼食べに行こう」

とリトルアが声をかけてきた。

リヤナンは机の上に出しっぱなしだった教科書を鞆に仕舞うと、小走りですでに食堂に向かっていたリトルアに追いつく。

「今日のお昼って何？」

リヤナンは横に並びながらリトルアに問いかけた。

寮生活のリトルアは朝食も寮で食べているので、ついでお昼の献立もチェックしているのだ。

「今日はねえ、白身魚の香草焼きだって。パンはライ麦パンらしいよ」

「そうなんだ。朝にライ麦パンのチーズサンド食べたのは失敗だったかな」

二人で他愛もない話をしながら食堂に向かう。

食堂に着いた頃にはどうやら時間前に授業が終わった学年があったらしく、半分ほどの座席が埋まっていた。昼ご飯を受け取り、適当な席に二人で向かい合って座った。

「そういえばリヤナンちゃん。精霊学の時の一人百面相は何？」

魚を骨と身に分けながらリトルアが口を開く。その言葉にパンをちぎっていたリヤナンの手が止まった。朝の出来事を話しても良いものかどうか一瞬迷ったが、他人の意見を聞きたいという欲求に負け、リヤナンは朝に起こったことをリトルアに話した。

「さすがに、貴族様に捨て台詞吐いた拳句に逃亡とかまずいことしたな。って思ってるんだよ。もう考えても仕方ないけどね」

リヤナンの話を聞いていたリトルアはもう食事をする手が止まっていた。そしてリヤナンの話が終わると、ため息をついた。

「ニエル家って言ったら貴族の中でも最も国王陛下に近い家だもんね。陛下の心ひとつで決まる物を目指している側としてはちよつと気になるよねえ」

すっかり自分のことのように考え込んでいるリトルアを見てリヤナンは思わず感心してしまう。自分のことなのに他人事のような雰囲気のリヤナンとは正反対だ。

「いや。もうやつちゃったことだしさ。今更気にしてもしょうがないし、国王陛下の気分ひとつで決まるとはいえその気分を覆せるほどの花を作出出来ない様じゃ今の貴族主導の認定だつて通らないよ」すつかりあきらめた様子のリヤナンにリトルアは食い下がる。

「朝にここにいたならきつとこの近辺に住んでるんだよね。貴族街に行ってみたら案外会えたりしないかな。もし会えたらそこで謝ってみたら？」

貴族街はこの学校からほど近い城の南側に広がる一帯を指す。文字通り貴族の屋敷が立ち並んでいる場所だ。

「さすがに貴族街を、訪ねる人物が不確かな状態で歩いたら、警備につかまると思うよ」

ニエル家の屋敷を一軒ずつ訪ねるにしろ、ローンの屋敷がわかったとしても突然訪ねて取り次いでくれるとは考えにくい。

「そうだよね。でもどうにかならないかなあ」
リトルアも自分の提案に無理があることは分かっていたらしく、あつさり引いた。

「ほら。もう食べ終わつたんなら帰るよ。今日は午後の授業が無い日なんだし。畑に寄ったら、私は家に帰って店の手伝いしなきゃ」
空になった食器が乗ったトレーを持って席を立つと、未だに思案顔のリトルアも後に続いた。

食器を返して、食堂を出ると二人で畑に向かう。二人の畑は同じ学年にしては離れた所にあるので校舎から出て間もなく二人は別れを告げて別の道に進んだ。

畑にて

畑に着いたリヤナンは朝に出会った彼は居ないとわかっていても周りを見渡してしまふ。

しかし、そこに探し人がいるはずもなく、諦めて畑に入る。隣の畑では、名家ブラント家が一人息子オットーのために雇った畑守りのデールが作業をしていた。

「こんにちは」

リヤナンは、花の状態を熱心に見ていて全く気が付いていないデールに声をかけた。

「ああ、リヤナンちゃん。こんにちは。毎日朝早くから来ているみたいだし、本当に熱心だね」

「私が普通で、人に任せっきりのまわりがおかしいんですよ」

ようやくこちらを見たデールの雇い主への嫌味に、しっかりと答えてリヤナンは笑った。オットーがクラスメイトだからと言ってデールの嫌味から庇う必要など全くないのだ。リヤナンの言葉にデールは「そりゃもつともだ」と笑って見せた。デールはリヤナン達が入学と同時にオットーの畑守りとして雇われているので、畑のお隣さんとしてもう三年の付き合いになる。

デールは三年前にスタンホール大学を卒業した後、フランツェンになれずに畑守りとなった人である。年齢はデールの方が七歳年上だが、リトルアとはまた違う友人関係にあるとリヤナンは思っている。実はリヤナンは彼によくテスト前の勉強を教えてもらっていた。座学は得意だったというのが彼の口癖だが、その言葉はあながち間違っていないことはリヤナンも過去の経験から理解している。

「どうですか？そちらの畑の様子は」

デールはブラント家の意向でバラの育種を行っている。デールのまわりにはちらほらと花が咲き始めているように見えた。

「ひとつ選考に出せそうな花が咲いたけど、本来の畑の持ち主が来

ないんじゃどうしようもないね」

そういつてデールの示した先には真朱色しんしゅいろいた。

で大輪のバラが咲いて

「わあ。これってもしかしてアリーセ系ですか？」

確かに人目を引くそのバラにリヤナンは感嘆の声を漏らす。アリーセとは三十年程前にできた品種だが、未だに人気が根強い品種で紅色が特徴的な花だ。目の前の花は色味と花の大きさアリーセとは変わっていた。

「そう。三代いや、四代前ハイン陛下の妃の名前を冠した、アリーセと白い大輪のバラを交配したら咲いた花」

未だにその花から目を離せずにいるリヤナンに説明するデールはさらに続けた。

「でも、俺から『立派な花が咲きました』なんて報告するつもりはないからね。リヤナンちゃんもオットー君に言いつけちゃだめだよ。不穏な言葉にリヤナンはそれまで見ていた花から目を離してデールを見る。今までに見たことのない、花を育てているときは全く違う邪悪そうな微笑みを浮かべていた。

「え、でもせっかく綺麗に咲いたのに、可愛いそうじゃ……」
控えめに反論してみるが、

「確かに可愛いそうだね。花が。でも、入学してから三年も経っているのに、その間畑に来たのは数えるほどなんて人間が万が一フランチエンなんてことになったら目も当てられないよね」
とあっさり言い放った。

「そりゃあ。契約だから畑の世話はするよ。でもそれ以上のことはしない」

もはや何を言っても聞き入れないであろうデールにリヤナンは何も言えなくなつた。戸惑うだけのリヤナンに先ほどの邪悪さなど消えたいつもの顔で

「ほら、リヤナンちゃんは自分の作業をして、早く帰りなさい。お家のお手伝いもあるんでしょう？」

そう言っただ会話を閉じられてしまう。仕方なくリヤナンは自分の畑で作業をして、

「お先に失礼します」

と言っただ畑を後にした。その時には、デールから「お疲れ様」と普通の返事が返ってきたので特に気まぎれになつたわけではないとリヤナンはほっとした。

執務室

フェローニア王国・国王陛下執務室。

部屋の端から端まで大きく歩いても数十歩はかかりそうな部屋には、大きめの窓があり秋口の柔らかな日差しをたつぷりと取り込んでいく。その窓に背を向けるように座っている人物がこの部屋の持ち主であるルトナー。フェローニアだ。ルトナーの前にはこれもまた大きくて立派な作りの執務机が置いてある。しかし、その豪華な作りの机を、紙の束がメモを取る隙間もないほど覆い尽くしていた。それら全てに目を通し、了承の物にはサインをし、保留の物・さらに事情を聴く必要がある物はそのまま横にどける。

今日、朝の会議が終了してから急激に増えた書類を前にルトナーは苦笑い交じりのため息をついた。

「どうやら議員連中は自分に畑に行く間を与えない作戦に出たらしい。」

その証拠に、持ち込まれる案件のほとんどが急を要さない物や、過去のものだったりするのだ。それらと判断が必要な書類がひとまとめになつてくるので目を通さなわけにはいかず、結果として徒労で終わる書類が増えてきているのだ。

（あの狸たちの魂胆が見え見えで、いつそ清々しいぐらいだな）

朝の議会での自分の発言が招いた結果とはいえ、こつも露骨に妨害行為に走られると腹が立つ。さらに、こんな程度を見破れないと思われているとは彼らの中で自分はいつたいどんな評価なのだろう。と考えても仕方のないことにまで思考が広がり始めた。ルトナーは不毛な書類との戦いを一時中断すると席を立ち後ろにある窓を開けテラスに出る。

この執務室は城の中でも高い位置にあるため、貴族街の奥まで見

渡すことができた。眼下にはこの城の自慢の一つである隅々まで手入れがされている庭が広がっていた。

（半年前まではあの庭からここを見上げるだけだったのにな）
見下ろした庭に立っているだけだったころの自分を思い出す。

ルトナーの父である先王もこの部屋で執務にあたっていた。王でありながら貴族たちの傀儡に成り下がっているという話は、息子であるルトナーの耳にも届いていた。しかしその時は、自分ではどうすることもできないことに情けなく思いながらも、庭からこの場所を見上げることしかできなかった。

（もうあの頃とは違うのだから）
感傷的になった自分に、書類の精神攻撃でどうやら少し疲れているらしい。とルトナーは自覚をする。

「でも負けるわけにはいかないんだ。必ずこの国を精霊から愛される国に戻してみせるよ」

庭からここを見上げていたかつての自分に語りかけるように呟くと、踵を返し執務室へと戻った。再び椅子に座り書類を片づけていく。全ての書類が片付いたときにはすでに陽が傾きかけていた。薄暗くなった部屋にはすでに明りが灯されていたが、ルトナーは誰かが明かりをつけに来たことすら気づかずにはいらしい。終わった仕事に満足げに頷くと、執務室を後にする。

（明日の朝も大学に行こう。自分の無知で傷つけた彼女に謝らないと）

ルトナーは早朝に大学の畑で出会ったリヤナンを思い出しながら決意を固める。

貴族のありようを真つ向から批判した彼女はルトナーにとって、非常に貴重な存在となっていた。

糸屋『エルスター』

リヤナンは石畳の道を朝と同じように速足で進む。目的地は朝の出発点、リヤナンの自宅だ。

「ただいま」

自宅の入り口ではなくお店の扉から入る。扉を開けるとドアベルが澄んだ音を鳴らす。

その音に、店番をしながら雑談に花を咲かせていた母と兄嫁がリヤナンの方を向く。店の中にお客はいない。

「ああ。リヤナン。おかえり」

リヤナンの帰宅に気が付いた母親が笑顔でリヤナンを迎える。しかしリヤナンの顔を見ると不思議そうに、

「どうしたの？学校でなにかあった？」

と問いかけた。その声色が小さな子供に語りかけるようで、リヤナンは内心苦笑いをしてしまうのと同時に、いつでも母親の勘は鋭いのだと舌を巻いた。

「いや。学校はいつも通りだったよ。それよりも何か手伝うことがある？」

リヤナンは嘘でごまかしながら、話題を無理矢理変えた。

「実はアーベルさんの所に配達に行つて欲しいのだけど」

そう言いつつ、足元に置いてあつたらしい大きな袋を台の上に乗せる。中には色とりどりの刺繍糸が入っている。

「今日はカミルちゃんがお店にいるようだし、リヤナンは夕ご飯まで帰ってくればいいからゆっくりしてきてもいいよ」

学校で何かあつたことに気が付いているようだが、母親は何も聞かなかつた。

「わかつた。荷物置いたらすぐに向かうね」

母親の言葉に苦笑いしながらも一端自分の部屋へ向かう。自室に入り、荷物を置いて、襟も外す。

再び店に戻ると、数人のお客が糸を物色していた。その中の一人が橙色の糸を手にとった時に、リヤナンはお客さんが糸を買ってくれることを願った。母親も熱心にその糸をお客に勧めている。やがて、本当にその糸を気に入ったのか、ただ単に母の勧めに負けただけなのかはわからないが、お客はその糸を買つと店を後にする。お客が店から出ていくのと同時に、リヤナンは無意識のうちに止めていた息を思いっきり吐き出した。

「やっぱりリヤナンが造つた花で染めた糸はよく売れるんだよ」

母親もすっかり上機嫌で親バカともいえる発言をする。その様子に兄嫁はすっかり呆れていたが、たとえ母親のセールストークのお蔭で売れたただけだとしても、リヤナンも嬉しくなり、足取りも軽く渡された袋を抱えて店を出た。

目的地は刺繍屋『アーベル』。刺繍屋とは、その名の通り、小物

から、カーテン等の大きな布製品に至るまであらゆるものに、刺繍を施して売っているお店だ。店同士が同じ通り沿いにある上に、糸屋であるリヤナンの家にとって、リヤナンが生まれるよりも前からのお得意様である。それ故に家族同士も仲が良く、その娘であるカミルは年齢が一つ下ということもあり子供の頃からよく遊んでいた。二人して、刺繍の手習いや、色の合わせ方はカミルの母親から教わり、糸の染め方や紡ぎ方などはリヤナンの祖父母から教わっていた。

その後、カミルは刺繍の腕を上げ店の看板娘になり、リヤナンは大学に進学して花を造ることを目指している。やっていることは全く違ってしまっただが、二人は今でもよい友人として付き合いは続いていた。

糸屋『エルスター』（後書き）

一向に話が進まなくてすみません。次回は刺繍屋、カミルの登場です。

今回刺繍屋の終わりまで書きたかったです。断念しました。

刺繍屋『アーベル』

「こんにちは」

刺繍屋「アーベル」の入り口をくぐるとエルスターとは違うドアベルの音が出迎えた。中にいたのは、九センチくらい正方形の布に花の刺繍を施しながら店番をしていたカミルだ。

「いらつしゃいませ。ってなんだ、リヤナンちゃん」

刺繍から顔を上げたカミルが、リヤナンを見て接客の顔から幼馴染の顔へと変わる。カミルはショートカットで金茶色の髪に切れ長の移色の目をしている。

「なんだってことはないでしょうよ。これ。ご注文の品物お届けに参りました」

リヤナンは少しおどけて配達の際の定型句を告げながら糸の入った袋を差し出す。

「ありがとうございます。いつも助かります」

カミルも取引相手と幼馴染を相手にする口調が混ざったような様子で受け答える。そして袋の中身を出し色とりどりの糸を、カウンターの裏においてあったらしい糸ケースの中にしまっていく。リヤナンは、カミルが先ほどまで持っていた布に目をやると途中でも精緻な図柄であることが分かる商品が置かれていた。リヤナンにとってこの目の前の幼馴染が、様々な色と技法で一つひとつ商品を仕上げていく様子は何度見ても舌を巻くばかりだ。

「相変わらず、すごい技術だよねえ」

リヤナンが毎度のごとく、素直に感嘆の声を漏らすと、

「そりゃあ仕事だしね。毎日やっていれば上達もするよ」

とカミルは謙遜するが、毎日の積み重ねでカミルが努力していることをリヤナンはよく知っていた。

「まあ、座ってお茶でも飲んで行ってよ。今、用意するから」

カミルはそう言い置いてカウンターの後ろにあるドアから奥へと入っていった。リヤナンはここへ来るときにいつも座る窓際の椅子に座った。目の前のテーブルは白いテーブルクロスに多様な小動物が刺繍されているものが使われていた。

それほど待つことなくカミルが奥から二人分のティーセットとお皿の上にはドライフルーツの入ったパウンドケーキが乗っていた。それらを並べてカミルはリヤナンの向かいに座る。

出されたカップの中身はバラのお茶だ。バラの香りがふわりと香りリヤナンは頬を緩めた。

出されたお菓子も遠慮なく一口に運ぶと世間話が始まる。

「リヤナンちゃんは、学校楽しい？」

唐突な幼馴染の質問にリヤナンは思わず考え込んだ。

「授業で、栽培技術とか、知識として覚えていくのは楽しいよ。学校に行く前は畑仕事とかは何となく

やってたけど、そういう作業にも理由があるってわかるとやる気も出るし。新しい花が咲いたらやっぱり嬉しいし」

しどろもどろになりながらなんとか質問に答えていく。正直、最近は目の前のことに精いっぱい楽しんでとか嬉しいなどの感情は置き去りになっていたからだ。

「そっか。ならいいんだ。今日入ってきたリヤナンちゃんを見ていたらちよつと心配になったから」

どうやら一目でわかるほど落ち込んでいたらしい。こんなことでは駄目だと密かにリヤナンは気合を入れなおす。

「正直に言うとき、色々とあるんだよ。貴族も平民も平等って云う触れ込みだけど実際はそうじゃないし。本当は進学せず、家の手伝いしながら嫁入り修行の方が正しい道だったんじゃないか。とかね」

帰り際のデールとの会話がまだリヤナンの中で燻っていたのだ。気合を入れたそばから弱音が口をつく。リヤナンの話を聞いていたカミルは、

「でも、リヤナンちゃんはエルスター家の期待だし。この前もお兄さんがここにきてた時にひとしきり、リヤナンちゃんを褒めて帰ったよ」

思いがけない言葉にリヤナンは眩暈がしそうだった。

「うちの兄は何を考えてるんだろうね。」

リヤナンが力なく言うと、カミルは笑って

「そりゃあ。自慢の妹のことを考えてるんだよ」

と笑いながら言っただけだ。目の前の幼馴染の表情は楽しんでいるときの顔だ。

リヤナンは、最早何も言い返す気力もなく、カップに残っていたお茶を飲みほし、お菓子を食べると、「またきます」と言って刺繍屋「アーベル」を後にした。帰り道の足取りは行きよりも軽かった。

家族との夕食

刺繍屋「アーベル」を後にしたリヤナンは、まっすぐ家に帰った。夕飯までに帰ってくるように言われたがその時刻まではまだ少し間があつた。

「ただいま」

学校から帰った時と同じように店のドアから入る。先ほどと違うのは兄嫁だけがカウンターに座っていることだ。母親は夕飯の支度の為、台所に下がっている。兄嫁は目の前の客の相手をしていた。夕飯までは、まだ時間があると、リヤナンは奥に続くドアから家に入りさらに外に出て、父と兄がいる工房へと足を向けた。工房では火を焚いて、水も多く使うため窓からは水蒸気が大量に吐き出されていた。入り口を開けると中から熱気が押し寄せるが、リヤナンはいつものことと気にせず奥に進む。奥では兄が花びらを煮出し染料を作っており父は染料を使って糸を染めていた。

「ただいま」

リヤナンが二人の背中に向かって声をかけると二人は同時に振り返ってリヤナンの姿を認めると、

「おかえり何か変わったことでもあつた？」
と兄が返事をした。

「変わったことは特になかったけど、手伝うことある？」

リヤナンが辺りを見回しながら聞くと父親が

「じゃあ、さつき染色した糸を洗ってくれるか？」

と言いながら、水の入った容器と染めたばかりの糸が吊るしてある場所を指した。

「この糸を洗えばいいんだね」

リヤナンはそっぴいなながら糸を手に取り張ってあった水にくぐらす。慣れた手つきで作業を進める。何しろ花を造るよりも前から教えてもらった作業だ。作業を終わらせて父親に報告すると、そろそろ夕飯の時間だと片づけに入っていた。リヤナンも糸を吊るし、水を抜き工房の掃除をする。全て終わらせて工房を出ると、父親が一番後に出て工房のカギを閉める。三人揃って家に入ると夕飯のいい匂いがした。今日はシチューらしい。キッチンのテーブルに着くと湯気を立てた料理が並んでいた。

「そっぴえばリヤナン。新しい花は咲いたのかい？」

食卓を囲みながら兄がリヤナンに問いかける。

「咲いたけど、国王認定は取れないと思う」

内心ドキドキしながら、リヤナンは答える。期待をしてくれている兄に今朝あったことはとても話せそうにない。

「いい加減認定を取れないとまずいのではないの？」

唐突に兄嫁が話に参加する。

「まずいけど、こればかりはどうしようもないですし」

突然のリヤナンの隣に座る兄嫁の参加にリヤナンは狼狽えた。猶も兄嫁の言葉は続く。

「どうしようもないって。このまま卒業じゃ四年間無駄だったじゃない」

リヤナンは頭の中は反論でいっぱいだが、実際はうつむいたまま無言も言えなくなる。

(取れないとまずいとか、四年間の無駄とかそんなことは私が一番解ってるのに)

「まあまあ。一番焦っているのはリヤナン自身なんだし、それにリヤナンが造った花で染めた糸はよく売れているし全くの無駄にはなっていないと思うよ」

重くなった空気は父の取り成しによって変えられた。しかしそんな空気もやはり兄嫁の一言で崩れ去る。

「リヤナンちゃんの糸が売れているのはお義母様が熱心に勧めるからですよ。あんなセールストーク聞いているこっちが恥ずかしいです!」
最早ヒステリーともいえるような声を張り上げる兄嫁に次の助け舟は兄から入った。

「まあまあ。あの色は実際いい色の糸だと思うし、母さんはそんなに張り切って勧めなくてもいいと思

うよ。それにもしリヤナンがフランツェンになれなくても家の畑で花を育ててもらう仕事をしてもらうつもりだから栽培技術はしっかり大学で身に付けてきてね」

母親のセールストークを諫める言葉を発し、さらに四年間は無駄ではないと今回の話題を全てまとめた斜め向かいに座る兄をリヤナンは思わずまじまじと見つめていた。兄嫁からの次の言葉はです、食事は何とか平和に終わった。

あとは寝るだけの段になってリヤナンは次の日の準備をしながらリヤナンはやはり今朝の出来事を考えていた。

（また彼に会えないかしら。ただの八つ当たりでひどいことを言うてしまった彼にはちゃんと謝りたい）

相手が貴族だからとかではなく、ひどいことを言ったのだから謝るのが筋だろうと改めて考えた。

リヤナンはベットに入って目を閉じると黒い髪に黒い瞳が印象的だった相手の顔が浮かび上がってきた。

和解

翌日の朝、リヤナンはいつもと同じ時間家を出た。昨日と同じようにいい天気だ。いつも通りの道を速足で歩く。

学校までの三十分を無心で歩き、いつも通り自分の畑へと向かう。毎朝のように自分が一番乗りのはずだったが、畑まで行くと人影が見えた。まさかと思いつつはやる気持ちそのままに駆け足と言える速度で人影に近づく。すると、足音で気が付いたらしい人影がこちらを振り向いた。

「ああ、よかった。ちゃんと会えて。おはようございます。リヤナン」エルスターさん

にこやかに言う彼は、

間違いなく昨日畑で出会ったローン＝ニエルだった。

「おはようございます。ローン＝ニエル様。まさかもう一度会えるとは思っておりませんでした。昨日の無礼を謝罪したいと思っておりましたので会えてうれしく思います。できますれば昨日の無礼をお許

し頂ければと思います。」

そう言ってリヤナンが頭を下げると、ローンは驚いたように、

「ちょっと待って。今日は、僕があまりにも無知で、昨日君を怒らせてしまったことを謝りたかったから来たのであって、昨日のことは君が謝るべきことではないよ。昨日は僕の方こそごめんなさい」

そう言ってローンも頭を下げる。それを見たリヤナンは慌てて

「そんな。ローン様に謝っていただく必要はございません」と言ってローンの頭を上げさせる。

「あの。じゃあお互い様ってことで、こういうの仲直りっていうの？」

嬉しそうに言ってきた顔が無邪気でリヤナンは返答に困る。

「昨日のは喧嘩って訳じゃないような気もしますが、でもそうですね。仲直りです」

リヤナンが答えると、ローンは一層笑みを深くして嬉しそうに笑った。その顔にリヤナンもつられて笑う。

「あのね。あと図々しいかと思ったんだけど、リヤナンさんの畑を見させてもらって、この花が一番きれいだと思ったんだ」

そう言っつてローンが指差した先には、一重で、花弁の色が中心が黄色で外側が許色をしたダリアの花だ。リヤナンも咲いたときにちよつと感動した花だった。

「夜が明けるときの太陽と空の色みたいで素敵だね」

「ありがとございます。私もその花は好きですが、バイカラーの花は染物には向かないので、一般認定を取っても使われることはないと思います」

リヤナンは不本意そうに答えた。この花はきつとここでしか咲くとなく終わる。自分の畑でなく貴族の誰かの畑だったら、あるいはとも思ってたがそんなもしもは無意味だ。

「あの。そうじゃなくて、この花、国王認定を取らない？」
唐突なローンの言葉にリヤナンは驚いた。

「そんな、無理ですよ。昨日もお話したと思いますが、予備認定を通してもらえません」

しどろもどろになりながらリヤナンは答える。悔しさで泣いてしましそうだった。

「そうじゃなくて。“僕”が取らせるから。そうだな放課後、今日何時に学校終わるの？」

俄かに張り切り出したローンについていけなくなりそうになりながらもなんとか「四時です」とだけ答える。

「四時ね。わかった。そしたら学校が終わったらこの花と、えっと、これだ。この時計を持って、ローン＝ニエルを訪ねてきたと門の所で近衛兵に言っ取り次いでもらって」

言いながら上着のポケットを探って取り出したのは銀色の懐中時計だった。繊細な鎖と凝った細工がされていた。リヤナンはいきなりこのことに戸惑いながらも出されるままに時計を受け取った。

「やばい。そろそろ帰らないと。じゃあ約束だからね」

そう言っってローンは駆け出し行ってしまった。その場に取り残さ

れたリヤナンはいまいち状況が呑み込めない。幻を見せられていた気分だ。国王認定を取らせるとはどういうことだろう。

（考えても仕方ない。本当に取れたらラッキー位に思っていよう。今のことは誰にも相談できそうにないな）

頭をすっかり切り替えたリヤナンは畑の水やりだけを済ませて教室に向かう。朝ごはんを食べ損ねて少し空腹だった。

和解（後書き）

やっとここまで来ました。書きたいシーンに辿り着けて良かったです。

しかし陛下がどんどん無邪気になっていってこっちがびっくりです。

密談

フェローニア王国コンフェレンツ・ルーム。

「陛下。今朝“も”どちらかにお出かけしてらしたのですか？」

この日の早朝会議が終わり、貴族たちも全員退出済みの部屋で宰相・ローン＝ニエルはいかにも不満気な声で問う。

「うん。昨日出会った学生の子に会って約束を取り付けてきたから。今日の四時頃にローン＝ニエルを訪ねてくる人は僕のお客だから帰してはだめだよ」

この国王陛下の突飛な発言はいつものことだと思いつつも、勝手に巻き込まれたままというのも落ち着かない。

「それはどういった用件で？」

言葉に刺を含ませたままローンは尋ねる。

「国王認定を行う花を持ってきてもらおう」

至極あっさりとした口調で重大事項を告げるのもいつものことだ。目の前の国王陛下にいちいち驚いていたら心臓がいくつあっても足りない。ローンはルトナーを見つめる。何でもない事のように装っているが、先ほどの会議内に渡された書類を見ている振りでローンの方を見ていない。それに気が付くと、実はルトナーも少々気まずく思っていることがうかがえてローンは内心笑みをこぼす。しかし、ことは国家事業の中枢に関わることである。国王陛下の暴挙を微笑

ましく思っているだけでは宰相は務まらない。

「人にものを頼むときはきちんと相手を見るべきでしょうな」

陛下自身もわかつていることを敢えて口にすることで、とりあえず話を聞く態勢を作る。案の定書類を置きローンの方を見たルトナーは、

「ずっと決めかねていた、ルトナー」フェローニア治世下第一号の国王認定の花を決めることになった。花はダリア。花の作成者はリヤナン「エルスター」。彼女はスタンホール大学の三年生。この花を認定することで卒業後、フランツェンの資格を得ることになる。本日午後四時、登城を言い渡してあるが、僕の名をローン「ニエルと偽ったため彼女はローン」ニエルに会いに来るつもりでいる。だからローン「ニエル宰相に彼女と会っていただきたい」

ローンは別に国王としての言葉を求めたわけではなかったのだが、ルトナーは毅然と言いつつ。一言の注意からいきなり国王の振る舞いになるのはルトナーが存外、真面目な性格だからだ。中庸がないともいえるが、それもまた目の前の彼が国王という仕事に真剣だからだと思えば悪いことでもない。

「国王認定を行うことにも、その女性が城を訪ねてくることも異存はございませんが、なぜ彼女の花の認定を決めたのか伺ってもよろしいでしょうか？」

花が気に入ったからだといえればそれ以外の理由はいらないのだが、ローンはそれ以外の理由がありそうだと感じていた。実は国王の即位後初の認定花というのは通常の国王認定よりも重要視されていて、貴族のフランツェンから選ぶのが古くからの慣例だ。リヤナン「エ

ルスターは貴族でもなければまだフランツェンでもない。

「多分、宰相が考えていることと同じだよ。彼女が貴族でもなく、フランツェンでもないからだ。あの狸爺達の息がかかっていない人間である必要があった。」

これは僕がこの国を取り返すのに必要な認定なんだよ。正直、彼女を利用するようで申し訳ないと思わないでもないけどね」

あっさりと認めたルトナーにローンは

「まあ、大学生である以上、目標はフランツェンでしょうから彼女にとっても悪い話ではないでしょう。それに一番目が貴族でフランツェンというのも慣例であって絶対ではないですから認定に文句を言える人間もおりますまい」

と、こちらもあっさりと返した。

「全ては今日の四時。彼女が城に来てからだ。というわけで、彼女の取次よろしく頼むよ」

「承りました。リヤナン＝エルスター氏が城に着次第、陛下の元へお連れ致します」

二人は共犯者の気分でコンフェレンツ・ルームを後にした。

約束の時（前書き）

ちょっと長めです。

約束の時

スタンホール大学三年の教室。午後四時を回り、この時期すでに太陽は西に傾いており、大きくとつた西向きである教室の窓から直射日光が当たっていた。すでに授業が終了した教室に人はまばらであるが、そんな中でもリヤナンは授業を受けていた体勢のまま静止している。

「リヤナンちゃん。もう授業、終わったよ？」

そんなリヤナン見てさすがに心配になったリトルアがリヤナンの顔を覗き込み、声をかける。

「ひゃつ。つて、リトルアちゃん。びっくりさせないでよ」

妙な叫び声をあげながら意識を目の前のリトルアに向けながらちよつとむくれて見せた。

「びっくりしてるのはごつちだよ。今日一日うわの空でせ」

リトルアは心底呆れたように言う。

「別にうわの空なんかじゃないよ。確かにちょっと落ち着かなかつたかもしれないけど」

リヤナンはささやかな反論を試みる。しかし、リトルアに声をかけられるまで授業が終わったことに気付いていなかったのだから、リヤナン自身説得力がないことは分かっていた。

「じゃあ。今日のお昼ご飯何だったか言える？」

「えっと。白身魚の香草焼きとライ麦パン」

唐突なりトルアの質問に少し考えて、リヤナンが答えるとリトルアは心の底から呆れた顔をして、

「それ、昨日の献立だから。今日は、羊肉のホワイトソース煮込みだったよ」

と言った。リヤナンは返す言葉を無くした。完敗である。すっかり大人しくなったリヤナンにリトルアは心配そうに、

「ねえ。本当に大丈夫？昨日のことまだ気にしてるの？そうじゃなくても何か気になることがあるならいつでも相談に乗るよ？」

と言った。

「いや大丈夫。本当にダメそうだったら一番に相談するからその時はよろしくね？」

そういつて改めて教室を見回すとすでに人があまりいないことに気が付く。最後に教室にある時計を見ると四時を少し過ぎ所だった。

リヤナンは思わず時計を二度見する。

「えっ。授業が終わったって、今日の授業が終わったの！？まずい。ごめん、今日約束あるんだ。先に帰るね。お疲れ様！」

リヤナンは広げたままだった教科書とノートを閉じ、乱暴に鞆に突っ込むと、あわただしく席を立つ。教室に取り残されたままのリト

ルアからあつという間に足音が遠ざかって行つた。

リヤナンは猛ダツシユで校舎を出るとまず資材置き場に向かつた。資材置き場は植物を育てるのに必要なものがまとめて置いてあり生徒なら誰もが何を使つても自由なことになっている。数ある資材の中から移植ゴテと5号鉢を持ち出す。

リヤナンは自分の畑に向かうと、朝ローンが褒めてくれた花を鉢に移していく。黙々と作業をしながら、朝の会話を思い出していた。ローンは「僕が取らせる」と言つたのだ。確かにニエル家なら国王陛下に最も近い家として陛下につながるのかもしれないが、あの自信がそんな単純な理由ではないような気がしてならなかつた。

鉢に花を移し、井戸で手を洗う。ハン力チで手を拭こうとしてふと、持っていた鞆をなでる。そこには今朝渡された懐中時計が入っていた。渡された直後には気が付かなかつたが、この時計の裏面には王家のエンブレムが入っていた。それがますますローン「ニエル」という人物を分からなくさせていた。本来ならこれは王家の人間の持ち物のはずだ。

しかし、出会つた人が国王だつたとは想像力が逞しいリヤナンにも思い至らず、エンブレムが王家の物だということの疑問は解けずになっていた。

リヤナンは鉢を脇に抱え、学校を出ると道路を横切り、跳ね上げ橋を渡つて大きな門の前に辿り着いた。

門の前には二人の近衛兵が立っている。リヤナンはローンに言われたとおりに近衛兵の一人に時計を差し出すと、

「私は、リヤナン「エルスターと申します。ローン「ニエル様にお取次ぎ頂きたいのですが」

と言つた。こんな時の正式な文句など知らないが精一杯丁寧に告げつつもりだ。近衛兵はリヤナンが差し出した時計と、リヤナン自身そして抱えられた花を順繰りに見た後、リヤナンの差し出した時計

を受け取り、この場で待つように言い奥へと消えていった。

リヤナンともう一人の近衛兵の間に気まずい沈黙が落ちた。抱えた鉢の重さが倍になったように感じ必要以上に持ち替えたりしていると、程無く先ほどの近衛兵が戻ってきてリヤナンについてくるように告げた。

花の咲き誇る前庭を歩き城の前まで来る。城の入り口を開けてもらうと扉の向こうには四十過ぎと思われる濃紺色のフロックコートを着た男性が立っていた。

「お初にお目にかかります。リヤナン＝エルスターさん。ローン＝ニエルと申します」

と言った。リヤナンはあまりの衝撃に返す言葉に何も思いつかず目の前の男性を凝視してしまふ。そんなリヤナンの様子を気遣わしげに見つつローンは「こちらへどうぞ」とリヤナンを奥へと案内し始める。どうにかリヤナンは正気に戻りローンの後についていく。数歩進んだところで、

「そうだ、この時計は私のものではないので、持ち主にはあなたからお返しください」

と先ほど近衛兵に渡した時計を再びリヤナンに渡した。

「この時計の持ち主は何者なのでしょうか？」

ローン＝ニエルが偽名だったことに軽いショックを受けつつ立ち直り切れていない頭でどうにか言葉を発する。リヤナンは頭と口が自分のものではないような錯覚さえ感じていた。

「それは今からご自分の目でお確かめください」

それだけ言うとローンは一際豪華な扉の前で足を止め、ついてきていた近衛兵に扉を開けさせるとリヤナンに中へ入るように促した。

謁見の間（前書き）

今回は短めです。

謁見の間

リヤナンが案内された部屋の中には毛足の長い赤い絨毯が敷き詰められており、高い天井と広い部屋だ。普通なら解放感を感じるはずだが、その場所にはどことなく緊張感が漂っていた。

部屋が醸し出す緊張感に、リヤナンは今すぐ「間違いました。」と帰りたい気持ちになった。しかし、それを抑えて前に進む。単に約束は守らなければいけないという思いだけがリヤナンを動かす。入ってきた扉の閉まる音に一層の不安が掻き立てられた。

正面の一段高くなった場所では大理石の床の上に立派な椅子が置かれていた。

所謂、謁見の間というものだ。目の前にある椅子は玉座だ。

「こちらでしばらくお待ちください」

先ほどローン・ニエルと名乗った男性がリヤナンに声をかけ、彼は前方にある扉から部屋を後にした。

一人取り残されたリヤナンはまさか玉座を前に棒立ちになっているわけにもいかず、持っていた鉢を横に置き、その場に膝をついて叩頭する。毛足の長い絨毯は膝をついても苦痛にはならなかった。

いくらリヤナンが平民といえども、フランツェンを目指している以上そのくらいの礼儀は心得ている。大学の一般教養のひとつに礼儀作法があるくらいなのだ。叩頭してリヤナンは改めて、自分の服装を認識した。

（しまった。いつもの作業服で来るような場所じゃなかった）

今更後悔してもどうにもならないが、リヤナンは時間を守ることだけに頭がいつぱいになり格好の場違いさにまで思い至らず、ここに

きていきなり失態に気がついた。自分が今いる場所と格好があまりにも離れすぎている。

それほど待つことなく、前方の扉が開く音がする。さらに硬い床の上を歩く音がして、玉座に向かっていることが分かった。足音は二つ。ひとつは先ほどからリヤナンを案内してくれていた、ローン＝ニエルのもものと思われた。叩頭しているリヤナンの視界は床に敷き詰められた赤い絨毯しかなく聞こえてくる足音だけが情報源である状態はリヤナンの不安を一層掻き立てる。しかしここで顔を上げるなどという暴挙に出られるはずもなく、リヤナンは頭を下げ続けている。

「リヤナン＝エルスターさん。顔を上げてください」

リヤナンは、静かに告げられる聞き覚えのある声に促されるまま、ゆっくりと顔を上げる。

目線の先には玉座に座る、白いフロックコートに黒いズボンという格好こそ朝とは違うが、見間違えるはずのない、昨日初めて出会った彼が玉座に悠然と座っていた。

リヤナンは叫びそうになるのをかなりの努力をして抑え込んだ。

国王認定

リヤナンは真っ直ぐに玉座に座る国王を見つめる。本当は朝のことも含めて色々聞きたいことがあったが、許可なく国王陛下に話しかけるなど許されない。ただ黙って国王陛下の話を待った。実際の時間にしたらそれほど長い時間ではなかったが、リヤナンにとって、それは退屈な授業を受けているときよりも時間の流れが遅くなつたように感じた。ゆっくりと国王陛下は口を開く。

「リヤナン＝エルスターさん。わざわざ来てくれてご苦労様でした。君の造つた花を正式に認定したいと思います」

その言葉を聞くと壁際に控えていた近衛兵がリヤナンに向かってくる。

「こちらでよろしいですか？」

近衛儀の言葉にリヤナンは慌てて横に置いてあつた鉢を差し出して、

「よろしく願います」

と言つて、近衛兵に向かって頭を下げる。近衛兵は恭しく鉢を受け取ると、国王陛下の元へと運んだ。鉢を受けとつた国王は

「この花の名前は何か決めている？」

とリヤナンに問いかけた。

「申し訳ありません。まだ何も。」

国王の問いかけにリヤナンは齒嚙みする。本来、名前は花の製作者が付けるべきものだ。認定が取れなくても、咲く花ごとに名前を付けている同級生もいる。朝に認定の話が出たのだから、呆けてないで考えておくべきだったのだ。

「そっか。じゃあ僕がつけてもいい？」

国王の楽しそうな声と、それでいて突飛な申し出にリヤナンは目を丸くする。

「陛下！」

どれくらい突飛かと言えばそれまで横にいて成り行きを見守っていただけだった宰相が声を上げたくらい突飛なことだった。その声に国王は叱られた子供のように首を竦めた。リヤナンはそのしぐさが妙におかしくて、ここがどこで、目の前にいる人物が誰かも忘れて笑みをこぼす。

「この上ない光栄なことと思います」

少しでも笑ったことで、緊張が解けたらしくその言葉はするりとリヤナンの口からこぼれた。

「ありがとう。じゃあねえ……」

リヤナンの言葉を受け国王は無邪気に考え出す。ゆるんだ顔に宰相もややあきれ顔だ。

「よし！この花はデメルング！」

さほど間を置かず国王は名前を決めた。

「デメルング（夜明け）ですか。とってもいい名前です。ありがとうございます」

リヤナンは素直に感嘆を漏らす。実はリヤナンは名づけが苦手だ。語彙や感性を増やすための海の向こうの神話や星座の授業は大好きだったが、それが個体名を決めることに結びつかない。考えることなく決めることができた国王には感動すら覚えた。一枚の紙に何事かを書きつけた国王が、

「じゃあ。これが認定書です。これからこの花で糸を染めたら学校を通してリヤナンさんに糸が渡ると

思います。そしたらその糸を襟に刺繍して下さいね。市場に出回るまでにはもう少し時間をください」

と告げると先ほどの近衛兵が国王に渡されたその紙を持って再びリヤナンの横に来る。持っているのは国王認定の用紙だ。それを認めるリヤナンは再び緊張した。震える手でそれを受け取り見てみると、国王認定の旨と国王陛下のサイン、そして自分の名前と、たった今、決められた花の名前が書かれていた。

「ありがとうございます。この花が国を支えられることを願っております」

授業で教えられたとおりの定型句をリヤナンが告げると国王は満足そうに頷き部屋を出て行った。

それを見送ったリヤナンも立ち上がり出口に向かう。さすがにずっと膝をついていたので腰が痛くなった。しかし、人生初の時間を終

えて緊張が解けたので足取りは軽い。再び壁際に控えていた、近衛兵に頭を下げるとリヤナンは出口をくぐった。

国王認定（後書き）

やっとここまでできた。って感じですよ。書き始めたときは、ここまででう話ぐらいの予定だったのに、どうしてこうなった。

感想・web拍手等お待ちしております。よろしく願いします。

飯の穩やかさ

入ってきたときと同じように近衛兵に扉を開けてもらいリヤナンは謁見の間を出た。

数分前の出来事が未だに信じられないが、右手にはしっかりと先ほどもらったばかりの国王認定証が握られていた。近衛兵に小さく頭を下げ廊下を歩き始めようとしたとき、リヤナンは目を疑う人物を捉えた。リヤナンが狼狽していると、

「リヤナンさん。これから少しお時間をいただけませんか？」

そういったのは先ほど謁見の間で見送ったはずの国王だった。国王の申し出を断れるはずもなくリヤナンは

「わかりました」

と答える他になかった。リヤナンの答えを聞くと国王は微笑みを浮かべて

「じゃあついできて」

と言いリヤナンが謁見の間に来たときとは逆の方向に歩き始めた。供も連れず先を歩く国王に疑問を感じながらもそれを口に出すこともせず、また先を歩く国王が話しかけてくるわけでも無いのでただ黙って長い廊下を歩いた。いくつかの角を曲がり、階段も昇りリヤナンが帰り道に不安を覚え始めたころ一つの扉の前に到着した。国王自ら扉を開けリヤナンを招き入れる。

「今日は天気がいいからテラスで話をしようか」

扉を閉めながら、部屋の奥の大きな窓の外を指す。テラスには白いテーブルと椅子が二脚設えてあった。国王が座ったのを見てリヤナンも勧められるまま向かいの椅子に座る。謁見の間では考えられない程距離が近い。友人のような距離にリヤナンは居心地の悪さを感じた。しかしどんなに居心地が悪くても国王より先に口を開くなど許されない。国王と目が合わせづらくリヤナンは無意識を装ってテラスから見える風景に目を向けた。外には、しっかりと管理された広大な庭が広がっていた。

(すごい庭だな。さすが王城)

リヤナン間が持たなくて視線を移しただけの庭にうつかり見とれていると扉をノックする音がした。その音に国王が応えを返すと静かに扉が開けられ、一人のメイドがお茶のセットを持って入ってきた。メイドは姿勢よく歩き、テーブルの前までやってくると、手早くセツティングを行い

「失礼します」

と言つて踵を返し歩き出す。思わずリヤナンが、

「ありがとうございます」

と返すとメイドは少し驚いたように振り返り、微かに微笑むともう一度会釈を返して、今度こそ部屋を後にした。出されたお茶からバラの香りが広がってくる。

向かいでは国王がさっそく出されたお茶を飲んでいるが、その動作が一枚の名画を見ているようで、リヤナンは呼吸さえ止めてその姿を見つめる。

国王が、その視線に気が付くとカップを置いてゆつくりとリヤナンに微笑んだ。その動作にリヤナンはいかに自分が不敬なことをしていたかに気が付いて慌てて視線を逸らした。その行動に国王は、今度は声を立てて笑い出した。リヤナンは最早どう対応していいかわからずいっぱいっばいになっていた。

「いや。ごめんね。こんな風に誰かとお茶を飲むなんて久しぶりでつい全部忘れそうになるよ」

ようやく笑いが収まった国王がようやく話し始める。

「陛下はまさかお茶を飲むために私を呼んだわけではないですよね？」

なぜ自分がここに呼ばれたかすら未だに理解できないリヤナンが素直に疑問を口にする。

「ここでは陛下でなくルトナーと呼んでほしいな。あと、そうだね、共にお茶を飲むためだけに呼んだわけでもないことも認めるよ」

そう言った国王は先ほどの笑顔は消えていた。一瞬にしてまどった。厳しい雰囲気はリヤナンの背筋は自然に伸びる。

「リヤナン＝エルスターさん。昨日の告発について詳しく聞かせてほしい」

思いがけない国王の言葉にリヤナンは茫然とするしかなかった。

飯の穂やかさ（後書き）

お気に入り登録して下さった方ありがとうございます。
告発内容まで行き着かなかった。

こんなことばかりですがお付き合いください。
評価とか感想とか拍手とか頂けると飛び上がって喜びます。

出来ない理由

身に覚えのない告発という言葉にリヤナンは動揺した。その動揺を感じ取ったルトナーは、静かに言葉を続けた。

「“告発”は言葉が乱暴だったかな。昨日、畑で君は『国王認定のためには予備認定を通る必要がある。さらにその予備認定を通るには賄賂が必要だ』とね」

ルトナーの言葉にリヤナンは昨日の八つ当たりとしか言えなかった、自分の言葉を思い出して赤面するしかない。

「あの発言は貴族に対する反発を目の前にいる人にぶつけてしまったただの八つ当たりです。未熟物の癩癩だと聞き流していただければ幸いです」

リヤナンはどうにか言い訳を重ねながら、昨日の自分の軽率な行動に泣きたくなってきた。

「いや。別に怒っているわけではないよ。僕はただ事実が知りたいと思っただけ」

すっかり恐縮しているリヤナンをなだめるようにルトナーの口調はどこまでも穏やかだ。その穏やかな口調にリヤナンは少し落ち着きを取り戻す。出されたお茶を一口含みゆっくりと息を吐く。

「申し訳ありませんが、私だってそれほど事実を知っているわけはありません」

と正直に告げれば、

「それでも公然と賄賂が存在していることを知っているよね。恥づかしながら僕は君が言ってくれるまで存在すら知らなかったよ。なんでもいいんだ、例えば君に賄賂を払うことを持ちかけた人物のことか」

ルトナーの言葉にリヤナンはクラスメイトであるアリアラの豪華な金髪が脳裏をかすめた。リヤナンの顔色が変わったのを見逃がさなかったルトナーはさらに言葉を続ける。

「クラスメイトは告発できない？」

どこまでも穏やかな口調にリヤナンは頷いてしまいそうになるが、どうにか思いとどまる。肯定はそのまま告発につながる。

「なぜクラスメイトに告発の対象者がいると？」

質問に質問で返すのは無礼だと思いつつも、リヤナンは聞かずにはいられなかった。

「大半は憶測かな。僕に熱心に認定を勧めてきたのはストラス」ゼストで娘が学生だったなとか。見ず知らずの人間に賄賂を持ちかけられた話だったらそう言えば話がそこで終わるからそう言うだろうな。とかね」

大半が憶測というルトナーの言葉にリヤナンは少し拍子抜けするが、その憶測が当たっているから恐ろしいのだと思い直す。それでも何も言えずに自分の手元に視線を落とすと

「君はいい子だね」

唐突なルトナーの感想にリヤナンは直前とは全く別の理由で何も言えなくなる。怪訝な表情でルトナーを見つめてしまう。

「だつてさ。『賄賂が払えないから畑守りになれればいい方』って言っていたでしょう？そんな状況を作った元凶を庇おうとするなんて十分いい子じゃない」

ルトナーの言葉にリヤナンは脱力する。要するに褒められているわけではない。ここまで来ているのだ、事実を話さないと帰れるわけがない。開き直ったリヤナンは、一気にまくしたてる。

「別にいい子だつて思われなくて話さないわけではありません。誰からも嫌われたくない、恨まれたくない。とかそれだけです。全部自分のためですから」

リヤナンの言葉にルトナーは少し苦笑いをする、

「解つたよ。変なことに巻き込もうとしてごめんね。これ以上こちらの事情に君を巻き込むべきではなかったのに。賄賂の件はこちらで処理するべきことだつたよ」

と言った。

「あの、それでは、私はこれで失礼します」

気まずい空気が二人の間に漂いそれに耐えきれなくなったリヤナンが、席を立つ。

「遅くまで引き留めてごめんね。もう暗くなりかけているし、送らせるよ」

言いながら立ち上がると入ってきたときのようになら自ら先に立ちりヤナンを誘導して二人は、部屋を後にした。

始まりの朝

翌日、フェローニア王国は雨模様だった。それでもリヤナンはいつもと同じ時間に家を出る。

雨が降ると畑の水まきの必要はなく、リヤナンはいつものお店で朝ごはんを購入後、直接教室へと向かった。誰もいない教室で朝食をとっていると、廊下からバタバタとけたたましい足音が響いてくる。

(こんな朝早くに登校する人がいるのは珍しいな)

リヤナンのんきに考えていると足音は教室の前で止まり、続いて勢いよく扉が開かれた。

「いた！リヤナンちゃん」

扉を開けたのはリトルアだった。息を切らせながら廊下を走ってきた勢いそのままに教室に転がり込んできた。

「あれ。おはよう。早いね」

大慌てのリトルアに動じることなくリヤナンは朝食を食べ続けている。最後の一口まで落ち着いて食べ終わるとリトルアは

「もう。今日ばかりはその落ち着いた様子が腹立たしいよ。リヤナンちゃん、国王認定決まったって本当？」

一気にまくしたてながらリヤナンに詰め寄ってくるリトルアに若干の恐怖をかんじながらも、

「本当。私も、いまいち実感なくて昨日から認定証何度も見返してる」

「一体何があつてそうなの？つていうかニエル家の方に文句言つたとか言つてなかったけ？何か関係あるの？」

リトルアの矢継ぎ早な質問に押されつつ

「最初から話すからとりあえず落ち着いてね。ほら座つて」

リヤナンはリトルアをどうにか落ち着かせて自分の隣に座らせる。最初からと言えばリトルアには誤解を解かなければならない。リヤナンの暴言を本気で心配していたリトルアには本当のことを言わなければならぬとリヤナンは話すべきはここからだと思つていた。リヤナンはゆっくりと話を始める。

「私がおととい会つた人物は、ローン＝ニエルは偽名で国王陛下だつたの」

リトルアは目を見開いて驚き、何かを言いかけたが、とりあえずは何も言わずに話を聞く体勢に戻つた。リヤナンはそのまま、昨日の朝も会つたこと、城に呼び出されたこと、城に行つたらローン＝ニエル氏は全くの別人で宰相だつたこと、謁見の間で会つたのが玉座に座る朝会つた人物だつたこと、そして、国王認定を貰つたことを話した。全て話したあとでリヤナンは

「でもさ、情報早いね。昨日の今日じゃない」

と素直に感嘆を漏らす。

「何言ってるの。昨日の夕飯前には発表されてたよ。大慌てでリヤナンちゃんの家に行ったら『まだ帰ってない』って言われちゃったんだから」

リトルアの拗ねた物言いにリヤナンは慌てて言い訳をしようとする。

「わざわざ来てくれたんだ。ごめんね。実はさ」

と、言いかけてリヤナンはふと思う。陛下とのやり取りを簡単に他人に話していいものかと。

「ちよつと色々あつて」

結局ごまかす方向で話を進めようとするが、リトルアは不信感を隠すことなく疑問を口にした。

「一大報告を家族にすることなく寄り道したの？しかも結構待たせてもらったけど帰り道にすれ違うことすらなかったよね。かなり遅く帰ったんじゃない？」

「あつ。それは帰りは城の馬車で送ってもらったからだと思う。家に着いたのは陽が沈みきる前位だったよ」

リヤナンは意識的にリトルアの最初の質問に答えることを避けておく。

「馬車で送ってもらった？何その状況?!」

まさかの展開にリトルアの声が大きくなる。リヤナン自身も昨日の

状況には頭を抱えなくなる。まさか陛下の“送らせる”が馬車だとは思わなかったのだ。断ろうとしたが時すでに遅く、御者に言われるがまま馬車に乗り込み家まで送ってもらった。馬車の中での所在の無さと言ったら思い出すだけで胃が縮む。

「もうね。大変だった。馬車が止まった音を聞きつけて母親どころか、隣のおばさんまで出て来ちゃうし。そのせいで国王認定を取れた最初の報告は母親に路上でするはめになったよ」

苦笑いをしながらリヤナンが報告すると、

「でも皆、喜んだでしょう」

リトルアは嬉しそうに微笑みながら言った。

「うん。閉店準備していたはずだったんだけどね。見たことない速さで工房まで駆け込んだ後、工房でも兄と父親の歓声が店まで響いてたよ。『今日はお祝いするから早く帰ってきなさい』って言われた」

その時に店にお客がいなくてよかったと今、冷静になると思う。そもそもリヤナンはどちらかと言えば、寡黙な父親が声を上げて喜ぶことなど今まで見たことがなかったのだ。

それから登校してきたクラスメイトにおめでとつを言われたり、羨ましがられたり、貴族達に嫌味を言われて怒ったりリトルアを何故かリヤナンが宥めたりしていると授業開始時刻になった。教師は開口一番リヤナンにお祝いの言葉を述べた。リヤナンは素直にそれを受け取って、その日の授業は始まった。

波紋

一日の始まりが雨だろうと城内の動きは変わらない。国王と宰相そして四家の貴族達はいつもの通りに会議に参加していた。相変わらず国王を抜きにして進む話にルトナーはうんざりしていたが、もちろんそんな心中を表には一切出さずに無関心を装って定位置にただ座っていた。

貴族たちの茶番も落ち着きを見せた頃、

「そつえば陛下、国王認定を決められたそうですね」

おもむろにストラス「ゼストがルトナーに話しかける。一見しただけでは何時もどおりの表情だが声色が硬い。その理由が分かっているルトナーは内心苦笑いをするが、ストラス本人は上手く隠せているつもりだろうから、特に指摘はしないでおく。相手の心の内が理解出来ている方がやりやすい。

「ああ。今、宮廷絵師にカタログ用の絵を描かせているところだ」

ルトナーは当然のように答える。年に一度国が発行する国王認定種のカタログは交易に使ったり、国民が見たりと、この国でのベストセラーだったりする。

「選ばれたことは大変喜ばしいことだと思いますが、あの花では少々地味ではないかと」

明らかに嘲笑を含んだ声だ。話を振った時の硬い表情よりも隠す気がない嘲りに、流石のルトナーもムツとする。

「それは花に対する文句と受け取って問題ないか？」

ルトナーは、本来なら一笑に付して適当に合わせながら説得するべきだと解つていても止まらなかつた。言葉を尽くしたところで目の前の彼は理解をしないだろう。

普段の様子からは考えられないルトナーの怒りを露わにした様子にストラスは飲まれそうになったが、国王とはいえ自分の半分の年齢の人間に畏怖を感じたなどと認めることはストラス自身のプライドが許さない。そしてそのプライドを守るために、相手よりも尊大な態度を示すということで一瞬前に自分が感じた畏怖を覆い隠そうとした。

「そういう意味ではございません。あくまでも、私の主観による感想でございます。即位後、一番初めに認定を出す花はフランツェンで貴族の者の花という慣例を破つてまで選んだ花があれば陛下の権威にさわるのではないかと心配をしているのでございます。

どうでしょう陛下？ここは今一度慣例に合う人物から花を選んではどうでしょうか？今なら事務手続きのミスということにでもして置けば間に合うでしょう。なんでしたら、私が良い花を見つけてきます。」

ストラスは自分の発言に満足そうに頷くとゆっくりと足を組み直す。明らかに過ぎた発言と不敬な態度に他の貴族達はハラハラしながら遠巻きに見つめるだけだ。宰相のローンだけはストラスをこれ以上の暴言を止めようと椅子から立ち上がろうとした。ルトナーはそれを、片手を上げることだけで止めるとゆっくりと自分が立ち上がった。ストラスの態度が虚勢だと見抜いてはいたが、ここまで花と自分を悪し様に言われて黙って居てやる謂れはない。

「君の主観は聞いていない。僕の権威に不安があるのなら、いつでも辞めるといい。一介の貴族に戻れば僕の権威のことなど心配する

必要は無くなるだろうし、君はもう一生分の利益を得ているだろう」
大声を上げている訳でもないのに周囲に絶対的な存在感を感じさせるルトナーに部屋の空気は凍りつき、誰も微動だに出来なかった。

「仰っている意味が良く解りませんが」

震える声でそれだけを言うストラスにルトナーは冷ややかな視線を送る。

波紋（後書き）

いったんここで切ります。ノートに続きは書いてあるので次の更新は早いといいな（希望）

文化祭月間のためどうなるかわかりません。

波紋の収束

ストラスの動揺した様子を見てもルトナーは最早、何の感情も浮かんでこなかった。この男は今、自分が切り捨てるべき人間だ。そこに同情すら浮かばない。

ここまで来たら引き返すことはできない。お互いに退路はもうないのだ。静かにルトナーは口を開く。

「現職のフランツェンに自身の罪は問わないという条件で告発を促したところ、フランツェンになるために君に賄賂を払ったと証言したものが相当数集まった。さらにその内の幾人かは辞意を表したので承諾した」

淀みなく告げられる言葉にストラスの顔色は蒼白になるが、それを押し隠すように凶悪な笑顔を貼り付け

「陛下。それは私のことよりもフランツェンのことを信じるということですか？」

ストラスの一言に周りの貴族達が弾かれたように「それはあんまりだ」と同調の声を漏らす。その声に後押しされるようにストラスは続けた。

「私共は先王の時代から王に最も近いものとして日々仕えてまいりました。その私を信じていただけないとは事によっては大変な事態を引き起こしますよ？」

ストラスは言葉を重ねるにつれ、媚びる口調に脅迫を織り交ぜる。ルトナーはいい加減うっとおしくなってきた。この後に及んで、ス

トラスはまだ自分が重要人物で、言い逃れができると思っているか。

「信用していないのはお互い様だろう。君は僕の選んだ花を信用していないから先程のような物言いになったのだから。それと証言だけでここまで言っていると思われるのは心外だ。できれば決定的な証拠を出す前に引いて欲しかったが、仕方が無いようだ」

ルトナーは言いながら、近衛兵に一冊のノートを持ってこさせる。運ばれてきた物を認めたトラスの顔色がますます悪くなり蒼白を通り越して土気色になった。

「君の家の家宰は善良な人間なようだね。帳簿の提出を求めたら素直に応じてくれた」

ルトナーの言葉にストラスは優秀とは言い難いが従順で使い勝手の良かった家宰の顔を思い浮かべた。家宰本人に主人を裏切った自覚は未だにないのだろう。ストラス自身王家の手が及ぶなどと考えもせず、裏帳簿などというものを作らずにいたのだから。つまりあの中には賄賂の決定的証拠が書かれていることになる。妙に冷静な自分に笑いがこみ上げてくる。人間追い詰められると意思とは関係なく笑えるものらしい。

「何がおかしい？」

一段下がったルトナーの不審な声も耳の中を素通りする。

「色々なことが」

ストラスが、精一杯の強がりと言うとルトナーは何も言わなかった。

部屋の中に自分の笑い声だけが響く。

やがて、ストラスの声も力をなくし部屋の中に沈黙が訪れた。この沈黙を破ったのはルトナーで、

「先王から仕えていた君に今更言うことではないだろうが、国王認定は王と精霊の契約だ。それに介入していたことさらに私腹を肥やしていたことは立派な国家反逆罪だ。精霊の加護は個人の利益のために在るのではない。処分は追って知らせる。それまで、自宅で謹慎していたまえ」

静かに全て言い終えてからストラスを近衛兵に連行させる。ストラスを牢に繋がなかったのはルトナーの最後の温情だということに、ストラス自身が気がついていた。そんな温情もルトナーの余裕故だと思つとストラスは腹立たしかったが、もはや抵抗するすべもない一発逆転の妙案は欠片すらも浮かんでこなかった。それは他の貴族も同じでおとなしく連行されていくストラスを誰もが黙って見送るしかなかった。

扉が閉まりストラスの姿が見えなくなつても残された貴族たちは身じろぎもせずルトナーの様子を伺うしか出来ずにいた。沈黙が部屋を満たし、居心地が悪い中、ルトナーは厳しい表情のままこの日の会議の終了を告げ、一番初めに部屋を後にした。

執務室 1

部屋を出るとルトナーは廊下を早足で歩く。

その後ろから宰相のローンが追いかけてくる気配がしたが、振り向くことなく執務室へと向かう。ローンも心得たもので特に話しかけてくることもなくただ黙って後ろを付いてくる。

「今日は特に特別な用事は無いだろう？何かあったら呼ぶから下がっていてくれ」

執務室の扉の前でルトナーはローンの方を見ることなく告げるとさっさと一人で部屋に入ろうとする。

「わかりました。後でお茶をお持ち致します。本日はお疲れ様でした」

そんなルトナーにローンは労いの言葉を述べて、執務室に背を向け、たった今歩いてきた廊下を、戻っていった。それを見送らずに執務室に入ると、会議用に着ていた白いフロッグコートを脱ぎ、机の端に置く。そして、窓際の自分の椅子に沈み込むように座り深く息を吐き出し、そのまま目を閉じれば雨が窓をたたく音だけがルトナーの頭の中を支配した。

考えなければいけないことは沢山ある。ストラスIIゼストの後任議員のこととか、ベツタリと癒着している他の議員の攻撃の躲し方など先手を打っておきたいことである。

さらに今日のうちに片付けておかなければいけない仕事も目の前の机に積まれている。

それでもルトナーは先程のストラスとのやりとりを思い出して自己嫌悪に陥る。

(もつと確実に事を運ばないと)

かなり感情的にストラスとの攻防が始まってしまったことは大問題だと思っている。国王が感情で議員を更迭したなどという感情を持たせるのは非常にまずい。ストラスとのやり取りを反芻しながらひとしきり思い返しているとそのまま背もたれに沿って腰が沈んでいく。それでも目を開くことなく考え続けいると、扉をノックする音が響いた。椅子に座り直し入室を許可する。もし宰相が何らかの用事で部屋を訪ねてきたのだとしたら、だらしのない格好でいたら絶対に怒られる。ところが扉を開けたのはメイドで、お茶のセットを持っていた。

「失礼いたします」

と言いながら入ってくるメイドに安心して、ルトナーはまた椅子に沈み込む。そのまますぐ隣にいるメイドの存在すら頭からはじき出して再び思考の海に沈み込む。もう外の雨の音すら耳に入ってくることは無かった。

どのくらいそうしていたのか、ふと我に帰ったルトナーの前にはまだ暖かいお茶が用意されていて、メイドの姿はもうなかった。流石にいつまでも考えに浸っている訳にもいかない。用意されたお茶を口に含み積まれていた書類の一番上を手取る。

目の前の仕事に集中するといつも感覚が戻ってきたようで、積み重ねていた書類は、小一時間ほどで半分の高さになっていた。

— 昨日と昨日の仕事量に比べると格段に量が減っていることから、どうやら議員連中は、昨日、国王認定を決めたことによりで妨害工事を諦めたらしい。この調子で進めていけば夕方には仕事は全部終わるし、今日の昼食は自室で摂る位なら時間的の余裕もありそうだ。ルトナーが終わった仕事量と残った仕事量を見比べて満足気に思っ

ていると再び扉をノックする音が響いた。基本的にこの部屋に来るのは先程のようにお茶を運ぶメイドか、仕事を運ぶ書記官か宰相位なものである。お茶は先程運ばれてきたことから、なにか追加の仕事かと訝しがりながら入出を許可すると開かれた扉の向こうに立っていたのは議員の一人である、アルタイ家当主・ジエン＝アルタイであった。

予想外の人物の登場にルトナーは目を見開いて驚いたが、瞬く間にそれを自分の中に押し込め、重ねて部屋に入ってくるように命じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1102u/>

花紡ぎの国

2011年11月17日01時47分発行